

2026年1月6日

高崎市教育委員会  
教育長 小林 良江 様

高崎市教職員組合  
執行委員長 峯岸 昌弘  
全群馬教職員組合  
執行委員長 田中 光則

## 早朝開門に関する要求書及び集会決議

私たちは12月19日、早朝開門について考える集会を開催しました。師走の平日夜にも関わらず、学校のこと、子どもたちのことを真剣に考える人々が集い、100名もの参加がありました。事業の問題点について考えを深め、涙ながらに反対を訴える参加者もいました。

集会での議論も踏まえ、主に以下3つの観点から、事業の再検討を再度要求します。

- 1) 子どもたちを守るための制度設計がない。事故があったら市が賠償すればよいという問題ではない。子どもを守ることが一番重要である。
- 2) 校務員に、本来業務ではない過剰な負担（責任）を課すことになる。
- 3) 個々の善意に頼った時間外労働が増え、教職員や管理職がさらに疲弊することが明らかである施策を、現場の意見を無視して決めることは労使の信頼を傷つける。

これまでの組合と市教委との交渉、市議会での答弁、記者会見での発言などで、この事業の問題点は明らかになっています。今のまま進めれば、責任をもって子どもたちを守れないことは、誰も本心では分かっているはずです。私たちは教育委員会の良心を信じたい、教育に携わる者としての矜持を信じたいと思っています。私たちが守るべきは子どもたちです。教育者として、大人として、みなさんと力を合わせたいと考えています。

一度立ち止まって真剣に考えていただきますよう、集会決議と併せ、下記要求致します。

### 記

- 1 早朝開門事業について一度撤回し、再検討すること
- 2 実施不可避であるなら、市の責任でニーズ調査と必要な人員配置をすること
- 3 組合と市長との意見交換の場を設定すること

以上

## 集会決議

現場で働く教職員に相談もなく、決定事項として突如発表された7時開門。  
どのくらいのニーズがあるのか。子どもたちの安全はどうやって守るのか。  
トラブルへの対応はどうするのか。教職員の働き方にどんな影響があるのか。  
議論も制度設計もないまま、「実施すること」だけが決まり、現場に丸投げされた。

彼らは言う。

教員の負担は増えない。ただ門を開けるだけ。トラブルはいる人が対応すればよい。  
反対意見に耳を貸す必要はない。賠償責任は市が負うのだからいいだろう、と。  
私たちは「子どもたちの安全を守りたい」「健全な発達を支えたい」と思っている。  
今のままでは子どもたちを守れない。だから私たちは声をあげ続ける。

彼らは言う。

校務員が門を開けるだけ。子どもには「入りなさい」で済む話、と。  
校務員には校務員の仕事がある。もし100人の子どもが来たらどうするのか。  
例え子どもが1人であっても、暖房もない教室に「入りなさい」で済む話なのか。  
そして、「責任を負えない」と退職する校務員の穴を埋めるための大量募集。  
これは学校の仲間である校務員への人権侵害だ。だから私たちは声をあげ続ける。

彼らは言う。

なんでも「嫌だ」という人はいますよ。  
「ともかく仕事が増えないように」ということでしょうか、と。  
誰かから冷笑され、馬鹿にされると、人は萎縮し、声をあげにくくなる。  
しかし、おかしいことに誰も「おかしい」と言わない社会は、やはりおかしい。  
私たちは、子どもたちのためにならないことには反対の声をあげる。  
教職員への人権侵害に対しては抗議の声をあげる。

私たちは、おかしいことには「おかしい」と言う人間でありたい。  
子どもたちに範を示す教職員として。大人として。  
だから私たちは声をあげ続ける。

本日、ここに集った参加者の総意として、この決議文を採択し、  
市当局に対して、事業の撤回と再検討を求めます。

教職員の思いを伝える100人集会参加者一同  
2025年12月19日

2026年1月6日

高崎市長  
富岡 賢治 様

高崎市教職員組合  
執行委員長 峯岸 昌弘  
全群馬教職員組合  
執行委員長 田中 光則

## 早朝開門に関する要請及び集会決議

私たちは12月19日、早朝開門について考える集会を開催しました。師走の平日夜にも関わらず、学校のこと、子どもたちのことを真剣に考える人々が集い、100名もの参加がありました。事業の問題点について考えを深め、涙ながらに反対を訴える参加者もいました。

集会での議論も踏まえ、主に以下3つの観点から、事業の再検討を求めます。

- 1) 子どもたちを守るための制度設計がない。事故があったら市が賠償すればよいという問題ではない。子どもを守ることが一番重要である。
- 2) 校務員に、本来業務ではない過剰な負担（責任）を課すことになる。
- 3) 個々の善意に頼った時間外労働が増え、教職員や管理職がさらに疲弊することが明らかである施策を、現場の意見を無視して決めることは民主主義の否定である。

これまでの組合と市教委との交渉、市議会での答弁、記者会見での発言などで、この事業の問題点は明らかになっています。今のまま進めれば、責任をもって子どもたちを守れないことは、誰も本心では分かっているはずです。私たちは教育委員会の良心を信じたい、市長や市議のみなさんの良心を信じたいと思っています。私たちが守るべきは子どもたちです。子どもたちを守るために、教育者として、市民として、責任ある大人として、みなさんと力を合わせたいと考えています。一度立ち止まって真剣に考えていただきますよう、下記の通り要請するとともに、集会決議を提出します。

### 記

- 1 早朝開門事業について一度撤回し、再検討すること
- 2 実施不可避であるなら、市の責任でニーズ調査と必要な人員配置をすること
- 3 組合と市長との意見交換の場を設定すること

以上

## 集会決議

現場で働く教職員に相談もなく、決定事項として突如発表された7時開門。  
どのくらいのニーズがあるのか。子どもたちの安全はどうやって守るのか。  
トラブルへの対応はどうするのか。教職員の働き方にどんな影響があるのか。  
議論も制度設計もないまま、「実施すること」だけが決まり、現場に丸投げされた。

彼らは言う。

教員の負担は増えない。ただ門を開けるだけ。トラブルはいる人が対応すればよい。  
反対意見に耳を貸す必要はない。賠償責任は市が負うのだからいいだろう、と。  
私たちは「子どもたちの安全を守りたい」「健全な発達を支えたい」と思っている。  
今のままでは子どもたちを守れない。だから私たちは声をあげ続ける。

彼らは言う。

校務員が門を開けるだけ。子どもには「入りなさい」で済む話、と。  
校務員には校務員の仕事がある。もし100人の子どもが来たらどうするのか。  
例え子どもが1人であっても、暖房もない教室に「入りなさい」で済む話なのか。  
そして、「責任を負えない」と退職する校務員の穴を埋めるための大量募集。  
これは学校の仲間である校務員への人権侵害だ。だから私たちは声をあげ続ける。

彼らは言う。

なんでも「嫌だ」という人はいますよ。  
「ともかく仕事が増えないように」ということでしょうか、と。  
誰かから冷笑され、馬鹿にされると、人は萎縮し、声をあげにくくなる。  
しかし、おかしいことに誰も「おかしい」と言わない社会は、やはりおかしい。  
私たちは、子どもたちのためにならないことには反対の声をあげる。  
教職員への人権侵害に対しては抗議の声をあげる。

私たちは、おかしいことには「おかしい」と言う人間でありたい。  
子どもたちに範を示す教職員として。大人として。  
だから私たちは声をあげ続ける。

本日、ここに集った参加者の総意として、この決議文を採択し、  
市当局に対して、事業の撤回と再検討を求めます。

教職員の思いを伝える100人集会参加者一同  
2025年12月19日